

縄文時代のカメ棺墓の新例

— 福岡県京都郡苅田町大字片島浄土院遺跡の報告 —

中 村 修 身

(I)

浄土院遺跡は、昭和47年3月に、小田富士雄先生をはじめ北九州市文化財専門委員黒野肇氏、苅田町郷土史研究会小串寿次・早田茂氏らの手によって、発掘調査がおこなわれ、昭和48年に「浄土院遺跡概要」として成果が報告されている。成果の中で注目される事は、縄文時代カメ棺墓の発見である。従来から、磨消縄文Ⅱ式（西平）にカメ棺墓があることは広く周知のことであるが、発掘調査例として報告されているものは少なくその事態が明らかでなかったため、この機会に再度報告しておきたい。

(II)

浄土院遺跡は昭和31年と昭和47年の2回にわたって発掘調査が行なわれ、報告もされている。原口信行氏は昭和31年の発掘調査の概要を次の様に報告している。「水田に家屋を建てる基礎工事のため掘起された土に、土器が発見された。土器は文様から平行沈線が発達し、渦巻沈線文、磨消縄文、口縁部の突刺連点が見られ、鐘崎、西平或は中国地方の中津、福田に近いものと考えられる。特に一区を画して層上面に小児掌大の割石を隙間なく密に敷き詰め打固めた平面がみられた⁽¹⁾」。

昭和47年の発掘調査に関しては「浄土院遺跡調査概報」に次の様に報告している。「甕棺墓は第6区から発見され、そこは低地であり、低地が墳墓として利用されている。第6区に於いて表土（水田面）より約11cm下より甕の胴上部が円形に現われ、Ⅱ層の黄色粘質土層よりⅢ層の灰褐色質土にかけ約30度の傾斜で据え置かれたような状態で発見された。甕の底部は表土より40cmのⅢ層の下部に達していた。地下水位が高くⅡ層より湧水し始め、Ⅲ層に至っては出水が甚しく、堆積土層であることも関連して、墓壙は確認することは出来なかった。人骨は甕棺内及び甕棺外の南側より20片近くが出土し、中には明らかに火葬骨と思われるものも見られた。甕棺は埋葬が浅いため耕作により、口縁部は一部を残すのみで大部分は削り取られてしまっている。人骨が甕棺外より出土したことは甕棺を覆っていた物質が腐蝕するにつれて甕棺内に土砂が流入し、内に収蔵されていた人骨が甕棺の南側に生じていた空隙に流出したと思われる⁽²⁾と報告し、人骨に関しては「成人女性の火葬骨である」と、縄文時代後期後半（磨消縄文Ⅲ式）のカメ棺墓の発見を報告している。

(III)

カメ棺は、昭和47年調査前と昭和47年調査時にそれぞれ1基ずつ、発見された。



第 1 图 浄土院遺跡甕棺出土写真

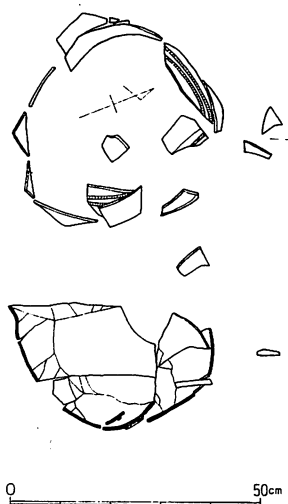
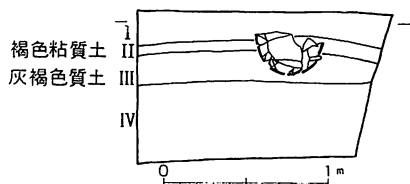
第3図①は昭和47年調査時に発見されたカメ棺である。

口縁部は4個所の山形をなし、断面が「く」字形に内傾し、内側がゆるやかにカーブし角度がない。文様には、二本の沈線と磨消縄文が施されている。口縁部から頸部・胴部にかけてゆるやかなS字状のカーブをなしている。長崎県深堀遺跡のV層の磨消縄文Ⅲ式深鉢形土器にみられる屈曲(角)がみられない。胴部は球形をなし、最大径が上位にある。頸部から胴部に移行するあたりに列点文を配す。胴部に平行沈線と磨消縄文を施している。さらに、上部の2沈線間には「X」字状文を4個所に施している。底部は浅い上げ底である。

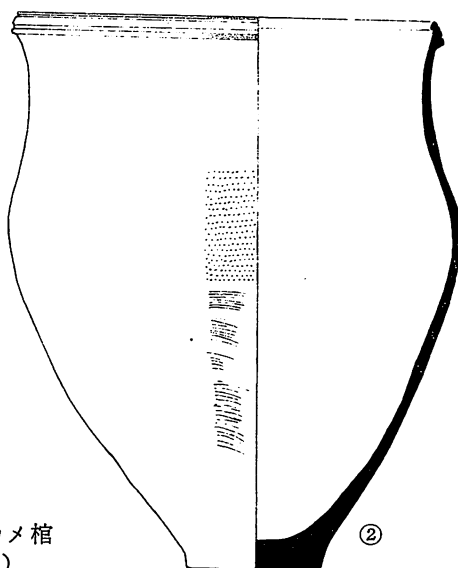
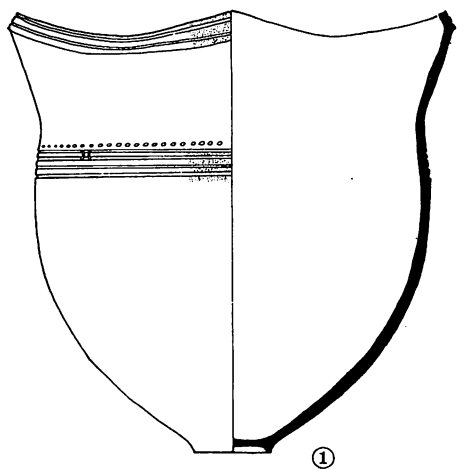
このカメ棺は口縁部の屈曲、口縁部から頸部胴部にかけてのカーブに、まだまだ磨消縄文Ⅲ式の範疇にはいる特徴がみられる。

第3図②は昭和47年調査前に発見されたカメ棺である。

胴部は従長でまのびぎみであり、最大径が上位にある。頸部から口縁部に向け直立し、口縁部の断面は「く」字状にかるく内傾している。口縁部内側に溝状の段が一段ついている。底部は厚手の平底である。文様は口縁部と胴部にみられる。口縁部外側に二本の沈線と磨消縄文が施されている。胴部は幅が不統一な縄文帯をめぐるしている。その直下より底部にかけ条痕がみられる。この甕にみられる縄文帯は、瀬戸内



第2図 出土層位と出土状況



第3図 縄文後期Ⅲ式カメ棺
(①.47年・②.27年以前出土)

を中心に分布する彦崎KⅠ式土器および彦崎KⅡ式土器の一部に、みられる。第3図②のそれは、彦崎KⅡ式土器と深い関係をもつものと考えられ、磨消縄文Ⅲ式における瀬戸内地方の交渉をものがたる土器といえよう。

磨消縄文Ⅲ式は熊本県西平貝塚⁽⁴⁾の土器をこう称されるようになった。磨消縄文Ⅲ式は九州を中心に、東は愛媛県伊吹町遺跡⁽⁵⁾、山口県岩田遺跡⁽⁶⁾まで分布圏をもつ土器文化である。磨消縄文Ⅲ式の最近の問題は、後期黒色磨研土器Ⅰ式との区分である。富田紘一氏は、三万田東原遺跡の調査概報の中に「三万田式土器と称するものには系統からみて二つのものが存在する。一つは西平式の伝統を引く磨消縄文系のものであり、他は黒色磨研の細線羽状文系のものである⁽⁷⁾。」と、整理している。浄土院遺跡出土の第3図①のカメ棺はこうした中において、磨消縄文Ⅲ式の新しい時期のもので後期黒色磨研土器Ⅰ式土器の中にその伝統を残してゆくタイプのものと考えられる。②は同時期の瀬戸内文化との関係を示す土器といえよう。

(Ⅳ)

磨消縄文Ⅲ式は、扁平打製石器の出現、十字形石器、土器の文様の単純化、無文化そして黒色研磨土器の出現等の、大きな変化を呈し、晩期に大きな影響をおよぼす。葬制におけるカメ棺墓の出現もその一つである。磨消縄文Ⅲ式のカメ棺墓群の出現は、長崎県筏遺跡⁽⁸⁾などの有明海沿岸地帯にみられるのみであったが、浄土院遺跡カメ棺墓群はそれが磨消縄文Ⅲ式全体の所産であることを確実とした。さらに、カメ棺墓が、磨消縄文Ⅲ式をはじめとし福岡県坂田遺跡⁽⁹⁾、大分県ネギノ遺跡⁽¹⁰⁾の晩期終末へひきつがれ、佐賀県五反田第四支石墓では夜臼式土器と遠賀川式土器の合口カメ棺が調査され、弥生文化への流れを示している。

頁数の関係からカメ棺についてしか触れることができなかった。葬制の問題はカメ棺のみでは、かたarienないことは言うまでもなく、成人女性人骨の火葬骨が浄土院遺跡のカメ棺中に埋葬されていたことは、愛知県吉胡貝塚⁽¹¹⁾や宮崎県松添貝塚⁽¹²⁾などと共に成人人骨の洗骨葬とともに縄文時代の改葬の一例として今後の葬制について重要な問題提起しているといえよう。

- (1) 原口信行(1958)「京都郡苅田町下片島の縄文遺跡」『九州考古学』5.6、
- (2) 浄土院遺跡調査会(1972)『浄土院遺跡調査概報』
- (3) 長崎大学医学部解剖学第二教室(1967)『深掘遺跡』
- (4) 小林久雄「九州縄文土器の研究」(1939)
- (5) 西田栄(1957)「宇和島市伊吹町出土の後期縄文式土器」『愛媛大学紀要』第1部、
- (6) 潮見浩(1960)「山口県岩田遺跡出土縄文時代遺物の研究」『広島大学文学部紀要』第18号、
- (7) 熊本県菊池郡泗水町教育委員会(1972)「三万田東原」、
- (8) 賀川光夫(1969)「縄文時代のカメ棺」『考古学ジャーナル』36、
- (9) 鏡山猛(1957)「筑後坂田の縄文土器」『九州考古学』2、
- (10) 松尾慎作(1954)「葉山尻支石墓第2次調査概報」『考古学雑誌』40-2、
- (11) 中山英司(1951)「成人骨を納めた甕棺」『古胡貝塚』1、
- (12) 賀川光夫(1969)「縄文時代のカメ棺」(『考古学ジャーナル』 34.35.37